

氏名	具島美佐子				
学位の種類	博士(学術)				
学位記番号	博甲第 8392 号				
学位授与年月日	平成 29年 9月 25日				
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当				
審査研究科	図書館情報メディア研究科				
学位論文題目	成島柳北研究—海外体験からの言論活動に焦点をあてて				
主査	筑波大学	教授	博士(文学)	綿拔豊昭	
副査	筑波大学	教授	博士(文学)	松本浩一	
副査	筑波大学	教授	博士(史学)	白井哲哉	
副査	筑波大学	教授	博士(教育学)	吉田右子	
副査	日本大学	教授	博士(国際関係)	小田切文洋	

論文の要旨 (2,000字程度)

本論文は、成島柳北について、欧米への旅行体験が、彼のその後の活動に大きな影響を与えたことを、柳北の漢詩文を読解・分析などをし、明らかにしたものである。

本論は6章から構成されている。序章では、成島柳北の人物や業績について概観し、研究の背景や目的と方法、先行研究、論文の構成について述べている。

第I章では、幕臣時代の柳北について、日記や漢詩、『柳橋新誌』初編を資料として考察している。彼は儒者として幕府に仕えてはいたが、早くから西欧文化を吸収する必要に目を向けるべきことに目覚めていたこと、また一方では『柳橋新誌』初編の中で描いているように、人間社会の裏側に潜むものへの関心を深めていたことを指摘する。

第II章では、明治維新後間もない頃の柳北について、山陽地方の旅行を中心に考察している。幕府崩壊後「無用の人」と自ら位置づけた柳北は、隠遁生活に入る。明治2(1869)年山陽地方への旅行を行うが、この旅の記録が「航薇日記」であり、後に柳北自身の編集である詩文雑誌『花月新誌』(82-117号)に連載されている。従来は過去の生活への追懐の念と無常観が底流に存在するとされていたが、ここには江戸以外の地方の人々との交流や、漢詩人や遊女との出会い等から、従来江戸中心の社会しか知らなかった柳北が、日本の国全体へ思いを馳せることになる変化が示されていることを指摘する。そして東京に戻った柳北は、漢文戯作『柳橋新誌』二編において、文明開化の浅薄さを批判して、西欧文化の上部だけの模倣に過ぎない状況は、維新政府の政策の貧しさであることを語っており、さらに明治2(1869)年6月には『東京珍聞』を出しており、後にジャーナリストとして活躍する先駆けが見られるとする。そして幕府崩壊から海外渡航までのほぼ4年半の歳月は、柳北にとって失望と試練の時期ではあったが、自己の役割を模索するための期間でもあり、柳北に海外へ出発させることを方向づけた時期であるとする。

第Ⅲ章では、主として「航西日乗」と「航西雑詩」から柳北と海外体験の関わりを考察している。維新に際しては幕府側であった真宗大谷派は、維新後の布教に活路を見出すために、東本願寺に翻訳局を設置する計画を立て、これによって柳北は真宗大谷派の人々とフランス、イタリア、イギリス、アメリカ等を歴訪する機会を得た。二番目に訪れたイタリアでは、近代化に邁進しつつも、過去の君主であるメディチ家やハプスブルク家を追懐する国民たちの姿に触れたことを契機として、柳北が近代化への啓蒙活動へ向かうことになったと指摘する。さらにイギリスでは、産業革命による近代国家の状況を見学し、ヴィクトリア女王治世下の繁栄を評価しつつも、社会の繁栄の裏側に潜むものにも目をむけており、これも帰国後の彼の活動に大きな影響を与えているとする。そして最後の訪問国のアメリカでは、大陸横断鉄道で大陸を横断しながら、自己を省みながら漢詩を詠む日々を過ごし、次第に希望を抱いて帰国後の活動を意欲的に思い描く方向に転換していったとする。さらにこの欧米旅行の中で、旧幕臣としての立場を忘れることのなかった柳北が、維新政府の人々とも交わり、近代文明の受容には統一された政権の必要があることも学んだとしている。

第Ⅳ章では、帰国してからの柳北の活動について、海外体験との関わりに注目しながら考察している。帰国後、『公文通誌』（後の『朝野新聞』）に招かれ、以前から関心のあった新聞の世界に入ることとなった。しかし柳北の理想とする国民の自由な言論活動の推進は、民権論を抑圧しようとする維新政府の政策とは相容れないものとなり、政府の弾圧を受けた柳北は、政府との直接対決を避けるようになり、「雑録欄」では軽妙洒脱が込められた平明で流暢な文章を展開させて、意見を述べるようになっていったとする。前田愛やその指摘を踏まえた五十嵐暁郎は、柳北には江戸市井の社会意識と、外遊で経験した西欧の市民社会の思想とが重なり合った、リベラルな発想が息づいたと主張している。本論文では、さらに柳北は彼自身が従来から親しんできた諷刺や諧謔性に富んだ文章を駆使し、雑録を書くことで弾圧に対抗していったとしている。そして皮相な文明開化には批判的な立場を貫き、日本の伝統文化を踏まえた西欧文化の受容をめざし、旺盛で多彩なジャーナリストとしての活動を具体的にたどっている。

終章では本研究の結論として、幕府崩壊後失意の中にあつた柳北が、イタリア等における近代化と過去の歴史との調和を体験し、これが転機となって、自己の幕臣としての意識を踏まえながら、近代化への啓蒙活動を進める意欲をアメリカの大自然の中で抱いたこと、そして帰国後は、日本の伝統文化の良い面を踏まえて、西欧文化の良い面を融合させた文化を目指す、ジャーナリストとしての多彩な活動を展開していったとしている。

審 査 の 要 旨 (2,000 字以上)

【批評】

本論文は、海外体験からの言論活動に焦点をあて、明治初期にジャーナリストとして多方面にその足跡を残した成島柳北の作品を読み解くなどして、その活動と思想の変遷について明らかにした研究である。

序章では、成島柳北という人物とその業績について概観し、研究の背景や目的と方法、先行研究、論文の構成について論じている。

まず「人物と業績についての概観」については丁寧にとまとめられている。成島柳北は、幕臣出身の儒学者であり、また洋学も兼修した人物である。漢学や漢文が時代や社会の中で一定の役割を果たした最後の世代で、幕末・明治の文学や思想を考えたときに看過できない重要な人物である。

したがって、成島柳北を研究することは意義あることといえる。

また、先行研究についてもよく調査されており、問題はないといえる。研究方法として、特に漢詩文の読解が用いられている。前田愛、乾照夫、高橋昭男らの評伝的な先行研究はなされているが、漢詩文を読み解くなどした、柳北の漢学的な側面からの先行研究は特になされていない。その意味で、この研究の新規性があるといえる。

第Ⅰ章、第Ⅱ章では、幕末に成された『柳橋新誌』初編と明治初めに成された『柳橋新誌』二編とを比較し、表現意識や描写の違いから、明治維新直後の成島柳北の「無用者」意識を分析する。『柳橋新誌』二編には、文明開化後の社会の変化を冷静に見る文明批評の精神も強く働いているとして、その背景にある余懷『板橋雜記』など中国文学とのかかわりなども考察している。また明治2(1869)年に山陽地方への旅行をもとに成された「航薇日記」からは、主に漢詩の解説を通して、旅行を通して社会の裏側を見る目を養い、女性の人格を尊重するといった、当時の成島柳北の心境の変化を読み解くことができるとする。妥当な分析といえる。

第Ⅲ章では、成島柳北の海外体験について、「航西日乗」「航西雜詩」「柳北詩抄」巻三の漢詩を中心に、その背景にある中国文学との関係も含めて詳細に読み解いていき、明治維新後の成島柳北の生き方を決定づけたのは、真宗大谷派の現如上人の随行員として1年にも及ぶ欧米旅行を体験したことである、とする。フランスで、岩倉具視使節団との交流とともに旧幕臣の人たちなどさまざまな人と出会い、博物館、美術館、オペラ劇場などを訪れ、柳北がヨーロッパの文化や芸術への理解を深めようとしたこと、アメリカで独立戦争の古戦場を訪れ、イギリスの支配に抗したアメリカの強い意志に共感を持ったことなど、欧米旅行が柳北にもたらしたものを具体的に述べている。こうした海外体験を通して、柳北が日本国家の一員としての帰属意識や国家の独立を重視という考えが育まれていったとしている。きわめて重要な指摘である。

第Ⅳ章では、これまでに考察した海外体験との関わりに注目しながら、帰国後の成島柳北の活動について述べる。帰国後、柳北はジャーナリスト・言論家としての活動をおこなっている。『朝野新聞』と『花月新誌』に載った柳北の文章を分析するなどして、それについて考察している。『朝野新聞』『花月新誌』の編集において柳北は、ヨーロッパの影響を受けて文芸を重視するとともに、邦訳文学にも力を入れたとする分析は、柳北に福沢諭吉ら啓蒙思想への共感があったとする指摘とともに重要である。なお、柳北は、西欧文化を、一面的ではなく、長所、短所の両面からみており、日本の伝統文化に対しても十分に目配りをしており、『花月新誌』に『源氏物語』各帖を詠んだ七言絶句を掲載するなどした。こうした欧米文化を摂取しながらも、日本の伝統文化にも目配りしていた言論活動を明らかにした点は高く評価できる。

従来の成島柳北研究において、ほとんど触れられることのなかったイタリア体験、アメリカ体験の重要性を指摘し、特にアメリカ体験については従来取り上げられなかった漢詩作品に注目して考察を進めていったこと、そしてこの時の体験が帰国後の彼の活動に密接に関係していることを、それらの活動の一つ一つたどることによって明確にしていったこと、そのような活動の芽生えは、幕臣であった時期あるいは幕府崩壊後の時期にも一貫して見られたことなど、その欧米体験を中心として柳北の活動全般を位置づけていったことは、柳北研究に新しい視点とともに重要な成果をもたらしたものと評価できる。成島柳北の研究を遅らせている要因となっている漢詩の詳細な解説を中心に実証的に論証を進めている点は、特に高く評価できる。また今後の柳北研究にとって重要な指摘がなされている点も貴重な研究成果といえる。

また本論文の付録として、「柳北詩抄」の目次、『花月新誌』上の柳北作品一覧など、各種の書誌調査は労作であり、成島柳北研究の基礎データとしてきわめて有益なものと判断される。

以上を総合的に判断すると、本論文は博士（学術）の学位論文として十分な内容を有すると認められる。

【最終試験結果】

平成 29 年 8 月 4 日、図書館情報メディア研究科学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。引き続き、「図書館情報メディア研究科博士後期課程（課程博士）の学位論文審査に関する内規」第 23 条第 3 項に基づく最終試験を行い、審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

【結論】

よって、著者は博士（学術）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。